宮城から、伝えたいこと。

Baton

つながれ、どこまでも

バトン
VOL.
17
FROM MIYAGI

特集

関わり、つながり、新たに生み出す

きて・みて

【語り部】語り部@仙台市 語り部タクシー（宮城県タクシー協会）

【スポット】亀山テラス360° -KESENNUMA OSHIMA-（気仙沼市）



「三陸復興観光コンシェルジェセンター」の学生たちが地域住民との交流の場として創っている、小泉ふるさと村。

あしたのクリエイティブ 株式会社シティエフエムの「この街と」

バトンとは

世代や地域を越えて広く「伝える」、リレーのバトンのように「つなげていく」という意味を込めています。
県内外や幅広い世代の方々が復興・伝承に興味を持ち、被災地へ足を運んでいただくことを目的に発行しています。

関わり、つながり、新たに生み出す

東日本大震災の発生直後から、
宮城県をはじめとする被災各地には
国内のみならず世界中から多くのボランティアが訪れました。
当時生まれたつながりは、今も各地で続いています。
そして、あれから15年を経た現在、
震災当時はまだ幼かった学生や、生まれていなかった子どもたちが参加し、
宮城県と他県に住む人との新たなつながりが築かれています。
若者は被災地でどのような学びを得て、
地域の人々は彼らにどんな未来を期待しているのでしょうか。
県外の学生が多く集う「学生広報部」が活躍する
三陸復興観光コンシェルジェセンターを訪ねました。

東日本大震災におけるボランティア活動は、被災者の生活基盤を取り戻す「復旧」にはじまり、地域を活気ある状態にするための「復興」から、現在は、「防災」の意識を醸成するフェーズへ移っています。

地震や台風、豪雨などが各地で多発している日本において、「災害」に無関係な人は一人もいません。

今回紹介する「三陸復興観光コンシェルジェセンター」は、日頃から「万が一」を想定した準備を行う「備災」の重要性を若者に伝え、全国に広めることを目的に多様な取り組みを行っています。その一つが、学生たちがホームページやSNSの管理・運用を行い、ボランティアや備災体験参加者を募る学生広報部。6代目リーダーを務める星野世莉さんをはじめ、13名のメンバーが、センター長・阿部寛行さんのもとで主体的に活動しています。

三陸復興観光コンシェルジェセンターの拠点の一つ「小泉ふるさと村」。ここで育てた野菜を使い、「自助共助体験伝承プログラム」で収穫・調理体験も行っている。

学生広報部が発信を続ける「志縁」と「備災」

三陸復興観光コンシェルジェセンターの成り立ちや活動内容について、センター長・阿部寛行さんと、学生広報部リーダーで茨城県在住の大学生・星野世莉さんにお話を伺いました。



学生広報部リーダー・星野世莉さんは筑波大学の3年生。普段は三陸復興観光コンシェルジェセンターの活動について情報発信を行うほか、年に何度か気仙沼に通い、地域住民と交流している。

学生の提案・発信が地域の交流を後押し

宮城県気仙沼市の小泉地区に、三陸復興観光コンシェルジェセンターがボランティア活動を行っている「小泉ふるさと村」があります。ここは、東日本大震災の津波により、全518世帯のうち266世帯が流失や全壊の被害を受けたエリア。もともと地域の結びつきが強固だったため、共助によって人的被害を最小限に留めることはできましたが、集団移転をきっかけに昔から続いていたコミュニティが希薄になってしまったと言いま

す。そこで、「かつての住民が顔を合わせて交流できる居場所をつくりたい」と、住民の斉藤盛さんが自身の所有地を利用した拠点づくりを発案。同センターのサポートで村づくりが始まりました。敷地内の小屋とそこに据えられたピザ窯、さらに、庭のベンチや春に見事な花を咲かせる桜などは、ボランティアと共に増やしてきたもの。現在は、敷地内にさらに、地域住民と全国の小泉ふるさと村民とのコミュニティ拠点「サクラキズナハウス（仮称）」の建設計画も進んでいます。その室内に置く家具や家電製品の購入資金には、クラウドファンディングを8月に実施。SNSで賛同の呼びかけを行ったのは、同センターの学生広報部です。普段は、センターの活動情報やボランティア募集などを発信しています。

別々の場所にいても オンラインで意見交換

学生広報部は、新型コロナウイルスが猛威を振るっていた頃に発足しました。センター長の阿部寛行さんが当時を振り返ります。「毎年気仙沼に来てくれていたボランティアサークルの学生が、コロナ禍で来られなくなり、次はいつ参加できるか、また戻って来られるかもわからない状態になりました。そこで、それぞれの生活拠点にいてもできることを考え、若者が得意なデジタル分野で活躍してもらうことを提案したんです」。

学生広報部の主な仕事は、センターのホームページ制作や運用、SNSを使った情報発信。阿部さんが部員を募ると、全国各地で手が挙がり、すぐに活動が始まりました。学校の卒入学に伴ってメンバーを入れ替えながら、現在は、高校生5名、大学生7名、大学院生1名の13名が活動しています（2026年8月時点）。参加する学生の大半は、センターが開催している「自助共助体験伝承プログラム」に参加経験のある学生。現リーダーで筑波大学3年の星野世莉さんも、昨年9月に同プログラムに参加したことがきっかけで学生広報部に入りました。「3日間のプログラムは、震災遺構を訪れて語り部ガイドの話を聞いたり、火起こしから始まる自炊プログラムやボランティア活動などを行ったりと、とても内容が濃く、当たり前の日常がいかにありがたいかを実感する日々でした。そんな3日目の最後、隊長（阿部さん）に『プログラムが終わってからが始まり。ここで学んだことを日常生活で生かすことが大事だよ』と言われ、私は学生広報部としてこの学びを広く発信したいと思ったんです」（星野さん）。

13名のメンバーは、宮城県2名、関東圏10名、関西圏1名と、住む地域もさまざま。ミーティングはオンラインで行われ、SNSの発信内容やデザイン、クラウドファンディングについてなど意見を交わします。このミーティングを開催するのはメンバーの誕生月。話し合いの最後に誕生日を祝い、メッセージや歌を贈るなど、メンバー同士のつながりも大切にしています。

常に「志縁」の精神で 被災者と向き合う

年齢も、入部のタイミングも、住む場所も違う13名ですが、全員に共通している思いが、「志縁（しえん）」の文字に現れています。それは、ボランティアと地域住民との関係性を表す造語。センター長の阿部さんが大切にしている言葉でもあります。ホームページやSNSでもたびたび目にします。「私たちは、支援する側とされる側に上下関係はなく、対等であるべきと考えています。学生広報部に新メンバーが入る際もその点を一番に理解してもらい、地域の方との縁を大切に、志を持って活動しようと伝えて思いを共有しているんです。隊長に教えてもらった『志縁』という言葉は活動の土台です」。

そんな星野さんの言葉を



夏季自助共助プログラムの「海の見える命の森整備ボランティア」は、セリフビルドでまき小屋を建てたり、建てた小屋の整備、森林整備などを行う。

じっと聞いていた阿部さんも、全国各地でボランティア活動を行ってきた経験からこう続けます。「若者がここで人と人とのつながりや関わりの大切さを知ることができたら、それはとても大きな収穫です。『ボランティア』という言葉は活動の入り口で、出口にあるべきなのは『お互い様』の精神。学生たちが中心となる未来の日本は、ボランティアという言葉が要らない、お互い様でいられる共生社会であってほしい。学生広報部は、そこをしっかり理解していると思います」。





小泉ふるさと村には、学生たちが手作りで建てた小屋と、ピザ窯、手作りのベンチなどが並ぶ。
「自助共助体験伝承プログラム」では、ここで自分たちで火おこしや調理体験を行う。

学生自身の体験がより響く情報発信に

学生に「隊長」と慕われるセンター長の阿部さんは、仙台市出身。高校時代に経験した宮城県沖地震が、今の活動につながっています。「初めてボランティアに訪れた阪神淡路大震災では、思いだけでは十分な支援ができず、災害が起きてから備えても意味がない。非常時には平時の行動が問われるのだと痛感しました」と話します。その後に起きた、新潟県中越沖地震、岩手・宮城内陸地震の際は、キャンピングカーを改装した「備災カー」で被災地に赴きボランティアを実施。東日本大震災でも、仙台で私設避難所運営などをしていましたが、沿岸部の被害を目の当たりにし、本格的な復旧・復興のため南三陸町に移住しました。これまでさまざまな団体を立ち上げて活動し、2016年に三陸復興観光コンシェルジェセンターを設立。ボランティアのほか、スタディプログラム、復興観光ガイドなどを行っています。なかでも大きな活動の一つが「自助共助体験伝承プログラム」です。

このプログラムは、学生の春・夏・冬休みやゴールデンウイークなどの長期休み限定で実施する宿泊型の企画。自分で自分の命と安全を守る「自助」と、避難後に周りの人と助け合って命をつなぎとめる「共助」のための行動を、被災地で体験し学びます。その経験を普段の生活に生かし、「備災」に導くことが目的です。

学生リーダーの星野さんは、「参加者の中には、リピーターも多いんです。それは、この体験で多くの学びが得られるだけでなく、私たちと向き合ってくれて、達成感を共創してくれる隊長がいるから。自分が考えていること、思っていることを自ら行動に移し継続してきた隊長は、尊敬する大人の一人です」と話します。学生広報部のメンバーが、SNSなどの発信において単に情報を流すのではなく自分事として自分の思いを乗せて記事を書いたりできているのも、自助共助体験伝承プログラムで学んだ糧があるからこそ、とのこと。



夏季自助共助プログラムの「自助ワークショップ＆若者トーク」は、大川伝承の会との協働で開催。
宮城県のみならず岩手県陸前高田市からなど若者が集い、備災についてディスカッション。

夏季自助共助プログラムの「東日本大震災スタディプログラム石巻コース」では、
日和幼稚園遺族有志の会歩き語り部の話を聞きながら周辺を歩いて体感。



阿部さんは「災害を自分事にするには、現地でボランティアをするだけでなく、学ぶことが大事。被災してライフラインが途切れてしまったとき、どうやって命をつなぎ、守るかを体で学んでほしい」とこのプログラムの意義を話します。参加者には、「一人の力は微力だけれど無力ではない」ということを必ず伝えているそう。「学生の中には、はじめは『自分一人くらいやらなくても』と考えている人もいます。でも、その一人が大事だということに気づいてほしい。生きるか死ぬかの場面では、一人ひとりの主体的な行動がカギを握ります。生きる力にスイッチを入れるこのプログラムの経験は、被災時の大きな力になるはずです」。

同志が増えることが未来の命を救う力に

学生リーダーの星野さんの地元は北茨城市。東日本大震災当時は幼稚園の年中クラスでした。当時、避難所で体調を崩したこと、原発事故を受けて新潟にある祖父母の家へ避難したことは覚えています。そんな彼女は、震災の記憶が少ない、もしくは経験していない学生たちが広報部で活動する意味をこう語ります。「私たちだから同世代の学生に対して同じ目線で伝えられるし、相手にも響きやすいと思います。今後社会に出て忙しくなっても、学生のとき東日本大震災について考えたというベースがあれば、いつか災害が起きてもすぐに行動できるはずです。それを伝えるためにも、学生広報部が長く続くことを願っています」。

センター長の阿部さんも彼らには大いに期待しています。「自助共助体験伝承プログラムに参加した人が、日常で学びをどう生かすかは、三陸の言葉でいう〝てんでんこ（てんでんばらばら）〟。平時に戻ることになります。それでも、全国に同じマインドを持った同志がいることは、学生にとって励みになります。災害大国日本では、今後も高い確率で何らかの自然災害が起きるでしょう。そのとき、『大したことはない』と平常性バイアスが働いたり、見当識を失って何をすべきかわからなくなったりする人も多いと思います。でも、学生広報部として平時から主体的に活動している彼らは、災害時も即座に動くことができると確信しています。一人でもそういう若者を増やし、自分の命を自分で守り、周りの大切な人の命をつなぎ、避難場所で知恵を発揮できる人になってほしいですね」。

学生広報部が頻繁に更新するSNSには、学生だけでなく大人の心も動かす言葉が並んでいます。彼らの「志縁」は被災地の希望となり、未来の命を救う力になるでしょう。



「学生たちからは次々にいろいろなアイデアが出てきて、ピザ窯も彼らのセリフビルドです。
自助・共助できる力をどんどん身に付けていく学生広報部たちは頼もしい」と阿部さん。

DATA 三陸復興観光コンシェルジェセンター（任意団体）◉宮城県本吉郡南三陸町歌津石浜78-1 ☎070-5018-1023 https://sanrikuhukkokanko.wixsite.com/website-1

collaborated with せんだいタウン情報 machico

vol. 17

machico（マチコ）防災部といっしょ



今回のテーマ

水害への備えを考えよう

近年、全国各地で水害が頻発しており、
日頃からの備えや適切な避難行動の重要性が増しています。
いざという時に自分や家族の命を守るためには、
どのような心構えや行動が必要なのでしょうか。
今回は、名取市震災復興伝承館の高野俊伸さんと
株式会社MARUTAの相澤太さんに、
東日本大震災の教訓を踏まえた水災害への備えについて教わりました。

＼ 体験してみた人 ／

machico防災部員
きー

＼ 教えてくれた人 ／

名取市震災復興伝承館
高野俊伸 さん

株式会社MARUTA
相澤 太 さん

machico編集部（以下ⓜ）：普段のお仕事について教えてください。

高野さん（以下高）：名取市震災復興伝承館の管理や案内を行っています。当館は震災や復興について伝えるだけでなく、水防倉庫の役割も兼ねています。

相澤さん（以下相）：名取市閖上で「北限のシラス」の加工・販売を主事業としています。

ⓜ：東日本大震災当時、お二人はどのような行動をとられましたか？

高：閖上で消防団として避難誘導にあたりました。

相：閖上港で被災後、津波警報を見て、工場にいた両親を連れて急いで小学校へ避難しました。避難後、工場と自宅は全流失しました。

ⓜ：震災から得た教訓を教えてください。

高：一番は、災害を「自分ごと」と捉えること。閖上には昔から「貞山運河より西側には津波が来ない」という安全神話があり、避難が遅れた方が多数おられました。また、一度避難した後に自己判断で自宅に戻って犠牲になられた方もいました。

相：私の場合は2004年に発生したスマトラ島沖地震の津波映像などを事前に見ており、「2メートルの津波でも助からない」という知識があったため、すぐに逃げる決断ができました。物品の備えに加え、知識を身につけておくことが重要です。

ⓜ：最近多発している水害について、どのような心構え・備えが必要だと思いますか？

高：ハザードマップで安全とされている地域であっても、想定外の浸水は起こりえます。マップを過信することなく、日頃から避難先や避難ルートを確認し、家族とも共有しておくことが大事です。「自分は大丈夫」と思わず、早めの避難行動をとりましょう。

相：自宅の様子を心配して引き返してしまわないよう、被災後の自宅の再建は保険で備えることも大切です。また、どこまでが保険の補償範囲か、被災した時のことをイメージしながら事前に確認しておくことも勧めています。

WHAT'S
machico防災部とは

仙台・宮城の人とまちを元気にする地域コミュニティサイト「せんだいタウン情報machico」の編集部員が、防災・減災に役立つスキルを体験して発信する「部活動」です。

machicoからアーカイブが見られます！

machico防災部が水害をシミュレーションしてみた

名取市震災復興伝承館には、水災の猛威をリアルに体感できる体験型の展示コーナーがあります。
machico 防災部が実際に体験してみました。

水圧体験ドア



水深30cmの浸水時にドアにかかる水圧（約36kg）を体感。大人が力いっぱい押してようやく開く重さで、子どもの力では開けるのが難しそうです。「水圧の壁」の恐ろしさを実感しました。

水中歩行シミュレーション



水深30cmの水中歩行を再現したゲタ。両足にかかる重さは約20kgにもなり、足元が水につかるだけで自由に動けなくなる恐ろしさを痛感。足を持ち上げるのもひと苦労。早めの避難の大切さが身に染みます。

災害体験VRコーナー



VRゴーグルを装着し、地震・津波・風水害の恐怖を疑似体験できるVR展示。特に津波や風水害は、あっという間にものすごい勢いで水が目の前に押し寄せてくる生々しい映像に身震いしてしまいました。迫りくる濁流に足がすくみます。





じぶんごとワーク

地震対策は十分でも、台風や豪雨への備えや心構えはできていますか？いざという時に慌てないよう、水害が起きた際に注意すべきポイントを確認して、命を守る行動を学びましょう。

監修：名取市震災復興伝承館／協力：株式会社MARUTA 相澤太さん



水害に備えて知っておきたい！

防災気象情報の新基準

令和8（2026）年から防災気象情報の発表方法が変わり、警報や注意報の名称に「警戒レベル」が付記されるようになりました。情報と避難行動が直結し、避難のタイミングがより明確になっています。

各警戒レベルと取るべき避難行動

レベル		行動
レベル1	早期注意情報	災害への心構えを高める
レベル2	注意報	ハザードマップ等で災害が想定されている区域や避難先、避難経路を確認する
レベル3	警報	避難に時間がかかる高齢者等は危険な場所から避難する それ以外の人も必要に応じて避難の準備や自主避難を始める
レベル4	危険警報	危険な場所から全員避難する
レベル5	特別警報	すでに安全な避難ができず、命が危険な状態 ただちに身の安全を確保する

＼取り組んでみたらチェックしよう！／

□どのレベルでどんな行動をすべきか、家族と一緒に確認した

参考：国土交通省気象庁「防災気象情報と警戒レベルとの対応について」

地震に備えて知っておきたい！

後発地震にも注意しよう

令和4（2022）年から運用が始まった「北海道・三陸沖後発地震注意報」。これは、日本海溝・千島海溝沿いでMw（モーメントマグニチュード）※7.0以上の地震が発生した際に、大規模な地震が新たに発生する可能性が相対的に高まっているとして、後発地震への備えを呼びかける情報のこと。情報が発表された場合は、1週間程度、平時よりも大規模な地震の発生に注意し、地震への備えを徹底しましょう。

※モーメントマグニチュード（Mw）とは、地震そのものの規模（エネルギーの量）を、断層の破壊規模（「断層の面積」×「ずれ動いた距離」×「岩石の硬さ」）をもとに算出した指標

＼取り組んでみたらチェックしよう！／

□後発地震が発生する可能性があることを理解した

□家族や友人など、身近な人と後発地震への備えについて話してみた

参考：宮城県「北海道・三陸沖後発地震注意情報について」





大雨や豪雨が発生したら、こんな時どうする？

Q 山の近くにいる時はどうすればいい？

A 急激に起こる土砂災害に注意！

大雨が降ると土砂災害の危険性が高まります。早めの避難を心がけましょう。避難が難しいなどやむを得ない場合は、丈夫な建物の上の階へ垂直避難、そしてなるべく山から遠い部屋に避難しましょう。

＼書き込んでみよう！／

あなたの自宅・学校・職場にいる時は？

Q 車を運転している時はどうすればいい？

A エンジンが止まるのは水深30cm！

エンジンが止まってしまったらすぐに自動車の外へ出ましょう。さらに水深と流速が増すと、脱出できないまま自動車ごと流される場合があり、大変危険です。特に、アンダーパスや高架下などの低い場所は注意しましょう。

＼書き込んでみよう！／

あなたの住む街のアンダーパスや
低い場所を探してリストアップしてみよう

Q 川の近くにいる時はどうすればいい？

A 橋の下で雨宿りは危険！

川の近くでは急激な増水のおそれがあります。橋の下での雨宿りは逃げ遅れの原因になり危険です。早めに避難しましょう。

＼書き込んでみよう！／

あなたの住む街・避難経路の近くの川を
リストアップしてみよう

Q 避難する時の服装はどうすればいい？

A 浸水時に長靴はNG！

長靴は水が入ると重くなり歩きづらくなるため避け、普段から履き慣れた底が厚めのスニーカーを履くようにしましょう。着衣は長袖・長ズボンで動きやすいものを選び、頭を守るために帽子やヘルメットの装着も忘れずに。荷物は軽くして背負い、両手が空くようにしましょう。

Q 避難中に気をつけることは？

A 氾濫した水は濁っている！

氾濫した水は茶色く濁っているため、排水溝などの境目が不明瞭になり、マンホールの蓋が開いていたり、大きな枝や壊れたものの破片が流れていたりしてもわからないことも。避難する時は、傘などの棒で足元の安全を確認しながら移動しましょう。



きてみて in 〈仙台市・気仙沼市〉

施設1　キーワード　□津波被害を知る □証言を聞く □避難を考える □復興を感じる

語り部紹介 @仙台市 語り部タクシー

語り部
稲葉清助さん
（タクシードライバー歴56年）



震災後に、タクシーの乗客から聞いた、住んでいる地域の被災状況なども語り部の際に貴重な情報として盛り込んでいる。

想いを乗せた語りが千年先の命も守る

自身で集めた膨大な3・11関連本や資料を積んで、沿岸部へと車を走らせる仙南タクシーの稲葉清助さん。宮城県タクシー協会が取り組む「語り部タクシー」のドライバーとして、国内外のお客様を数多く案内してきました。震災遺構に向かう道中は、仙台エリアの特徴や海抜、海までの距離、指定避難場所といった情報と、自らの経験談を交えた当時の状況、自助共助の大切さを時折車を停めて伝えます。

思いのこもった稲葉さんの言葉は、本や資料だけでは得られないもの。稲葉さんは、休日のたびに車を走らせ、2年かけて東北沿岸部にある伝承施設の約6割を訪ね、現地で話を聞いて回ったそうです。「震災後に電気が復旧し、テレビから流れてきた映像は、行方不明の身内を探す人、幼い子どもを津波で亡くした人など、悲しみに溢れていました。そんな思いをする人が一人でも減れば、語り部をする意味があるのではないかと思いました。それは今も変わりません」。稲葉さんは、時々声を詰まらせながら、語り部タクシーを始めた理由をそう話します。

2時間のコースは、荒浜エリアが中心。さらにお客様の時間があれば、名取市の閖上地区も案内します。「最初の頃は、多くの人が犠牲になった海を見るのも辛かった。でも、遠くから来てくださった方に、一つでも多く震災の教訓を得てほしいという思いで、時間を目一杯使って話しています」。現地に着くと、持っていた資料や写真を示しながら、この場所で何が起き、どんな被害があったのかなど、相手の年齢や住む場所も考慮しながら詳細に説明。現地で聞くからこそ、当時の情景がリアルに浮かびます。「年齢を考えれば、私が直接話を届けられる人の数は限られていますが、お客様が子どもへ、孫へと話すことで、できれば千年先まで津波の怖さが伝わってほしいと願っています」。こう語る稲葉さんの優しいまなざしは、強い使命感に満ちていました。





〈上〉語り部タクシーで必ず訪れるのが、震災遺構仙台市立荒浜小学校とその周辺。乗客と一緒に校舎を歩きながら案内している。〈下〉車を路肩や駐車スペースに停め、震災前の様子を説明することも。



震災前後のまちの様子や津波の脅威を伝える写真など、自ら収集した本や伝承館で入手したパンフレットは、語り部の大切な資料。

DATA 仙南タクシー株式会社 ◉宮城県仙台市宮城野区日の出町1-6-27 ☎022-236-1070
https://sennantaxi.co.jp/



山頂まではモノレールで約6分。ユニバーサルデザインの車両は、車イスでも安心。

新たな魅力を備えたビュースポット 15年を経て市民の念願が実現

三陸復興国立公園内にある亀山は、絶景スポットとして知られています。以前は、麓から8・5合目までをリフトでつないでいましたが、東日本大震災の津波と火災により全壊。あれから15年が経った今年7月19日、中腹の駐車場から海抜235メートルの山頂までを結ぶモノレールが開通しました。山頂には、全方位の眺望が〝体感〟できる「亀山テラス360°」もオープン。そこは、太平洋と山々が織りなす景色はもちろん、港に出入りする漁船や海に浮かぶ牡蠣いかだといった、地域の営みも見られる場所。時間や季節ごとに移り変わる景色は、見飽きることがありません。

施設2　キーワード　□津波被害を知る □復興を感じる

亀山テラス360° -KESENNUMA OSHIMA-



DATA ◉宮城県気仙沼市亀山3-2 8:30～16:45（駐車場、テラス、駅舎、トイレ等園内施設）、8:30～15:40（モノレールチケット販売）※季節によって変更の場合あり 休機械メンテナンスによる休業日あり（HPで案内） モノレール往復乗車券　中学生以上1,200円、小学生600円、未就学児無料
https://kameyama360.jp/

問　山頂から見える田中浜と小田の浜のラインが、ある形に見えると話題になっています。何の形に見えるでしょうか。ぜひ現地で確かめてみてください。

答



山頂のメインテラス。高い柵などがないため解放感抜群。目の前に広がる大パノラマを堪能できる。

異なる景色が楽しめる4つのテラスがあり、こちらは「そらのテラス」。月・金・土・日・祝日はカフェスタンドも営業。



きてみてマップ

きてみてで紹介した施設のほか、特集・あしたのクリエイティブで紹介した場所も掲載しています。



立ち寄りスポット

① 気仙沼市 リアス・アーク美術館



東北・北海道の美術作品に加え、地域の食や歴史民俗資料の展示など博物館としての側面も持つ施設です。「東日本大震災の記録と津波の災害史」と題した常設展示もあり、気仙沼地域の文化や歴史を後世に伝える場となっています。

DATA ◎宮城県気仙沼市赤岩牧沢138-5 ☎0226-24-1611 🕒9:30-17:00（最終入館16:30） 休 月・火・祝日の翌日（土日を除く） https://www.kesennuma.miyagi.jp/riasark

② 南三陸さんさん商店街



復興のシンボルとして生まれた商店街で、隈研吾氏が設計した南三陸杉の木造店舗が特徴です。鮮魚店、飲食店や土産店などの多彩なお店が並び、名物の「南三陸キラキラ丼」をはじめ、三陸の食と賑わいを楽しむことができる観光スポットです。

DATA ◎宮城県本吉郡南三陸町志津川五日町201-5 ☎0226-25-8903 🕒休 営業時間や営業日は各店舗により異なるため下記WEBより要確認 https://www.sansan-minamisanriku.com/

③ ラプラス公園 in せんだい



「みやぎ応援ポケモン」のラプラスをモチーフにした遊具公園で、2026年4月に若林区の海岸公園内に誕生しました。ラプラスをはじめとしたみずタイプのポケモンの遊具が並び、子どもから大人まで、海風を感じながら楽しむことができます。

DATA ◎仙台市若林区藤塚地内 ☎022-355-6667（海岸公園藤塚地区管理事務所） 🕒24時間（管理事務所：9:00～17:00、駐車場：9:00～16:30） 休 なし https://laplace-miyagi.jp/park/

©Pokémon. ©Nintendo/Creatures Inc./GAME FREAK inc.
ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの商標です。

あしたのクリエイティブ

vol.17

株式会社仙台シティエフエム開催のイベント「この街と」

地域との交流がまだ希薄だった震災直後の放送では、仙台市や交通局から得た情報を中心に放送していました。番組サポーターのレポートにも助けられましたが、そこには限界も。コミュニティが深まれば、有事でもより地域に密着した放送ができます。ラジオは情報を得られる場所であり、発信できるツールだと感じたそうです。

楽しく、でも真剣に子どもの防災意識を育む

イベントは幅広い世代がターゲット。楽しく学べる防災ワークショップをメインコンテンツに据えています。「震災を経験していない小中学生の場合、言葉だけではなかなか防災に興味を持ってもらえません。そこで、工作などの遊びを通して、防災の入り口にしてほしいと考えました」と青木さん。これまで、番組にも出演している仙台市地域防災リーダーなどを講師に招き、新聞紙スリッパやペットボトルランタン作りなどのワークショップを行いました。そこにはこんな意図もあると言います。「実際の災害時は、スリッパもランタンも作らないかもしれません。でも、作ってみることで『ガラスが散らばって、素足では危ないんだ』『電気がない暮らしとはこういうことなんだ』と感じてもらい、防災を考えるきっかけにしてほしいんです」。当日は夢中で工作を楽しむ子どもの姿が多く見られ、災害VR体験なども大盛況でした。

また、2026年に開局30周年を迎え、4月からは毎月第3金曜に「この街とオープン・デイ」を始めました。「学校終わりの夕方の開催にし、防災ワークショップだけでなく、マジックショーやサイエンスショーなどのコンテンツを用意しています。毎回近隣の子どもたちでにぎわいますよ」。

より広く、より深く、地域との交流を活発にすべく、ラジオ3では今後の構想も考えています。「将来的には出張版としていろんな場所で開催したいですね。それから、このラジオ局を地域のふれあい広場のような存在にしたいです。デジタル時代に逆行したアナログな目標ですが、そのつながりこそが、いざというときの力になると思っています」。

ラジオ局が取り組む地域連携と災害への備え

ラジオ局が中心となり、地域コミュニティの構築と、防災の意識向上を目指すイベント「この街と」。主催する仙台シティエフエム（ラジオ3）は、仙台市若林区にあるコミュニティFMです。開局日の2月21日と、東日本大震災が発生した3月11日に、スタジオがあるビルで防災関係のコンテンツを軸に開催。グループ会社である㈱ユーメディア印刷センターを会場にした夏の開催では、遊びの要素も盛り込み夏祭り風に行っています。当日は、ラジオ局が地域住民の集いの場になります。「毎年3月11日にやっていた震災特番が一区切りを迎え、次のステップとして、『地域の人と交流が生まれるラジオ局にしよう』と2024年にイベントを立ち上げました。防災は大きなテーマですが、キッチンカーを呼ぶなど気軽さも意識しています」と、パーソナリティの青木朋子さん。





〈上〉屋外にラジオスタジオを設置。イベント中の生放送に地域の人が飛び入り参加することも〈左〉新聞紙スリッパや紙のお椀・コップ作りなど、子どもたちが楽しめるコンテンツも。



仙台市と連携し災害VR体験を実施。
災害発生時の行動に対する解説もセットで行った

Baton column

震災伝承や防災に関する
注目の情報をご紹介します。

海岸林の大切さと
震災の教訓を伝える絵本
『まっちゃんとこまっちゃん』



国内外で森づくりに取り組み、東日本大震災後に「名取市海岸林再生プロジェクト」を立ち上げ海岸林の再生を進めてきた公益財団法人オイスカが、名取市出身のイラストレーターico.さんと協働し、海岸林をテーマにした絵本を制作しました。海岸林は、平時は海風から農作物や人々の生活を守り、災害時は津波の威力を弱める役割もあります。しかし、「松枯れ」という病気や火の不始末による火災などのトラブルにも見舞われています。そんな海岸林への理解を深めみんなで守っていけるよう、地域の方々とのワークショップを重ねながら完成しました。





海岸林を示す松の木の絵は、ワークショップ参加者の手にインクを付けてみんなで描いたもの。

『まっちゃんとこまっちゃん』

作・絵　ico.　発行　公益財団法人オイスカ
初版は、クラウドファンディング支援者への配布と、名取市内の児童施設等に寄贈される。
来年度以降は全国書店での出版を目指している。

【問合せ】公益財団法人オイスカ 宮城県支部　☎022-265-3350　✉oisca-mb@kind.ocn.ne.jp　https://oisca.org/

アンケートにご協力ください

Baton vol.17はいかがでしたか？今後のより良い紙面づくりのために、皆さまの感想やご意見をお寄せください。回答いただいた方には、抽選で宮城のお米をプレゼントいたします。アンケートのご回答は下のQRコードからお願いします。

←アンケートはこちら!

回答期限
2026年12月21日（月）まで

**抽選で20名様に、
宮城のお米
『だて正夢』(2合)を
プレゼントいたします。**

当選は発送をもって
代えさせていただきます。



だて正夢

お米本来の甘みともちもちした食感が特長で、噛むほどに一粒一粒からお米本来の甘みとうま味が味わえる逸品。

提供：宮城米マーケティング推進機構

いまを発信! 復興みやぎ

宮城の復興の「いま」を
SNSでお伝えしています!
皆さまからの投稿も
お待ちしております!

LINE　Facebook　X（旧twitter）　Instagram

Baton　発行元　宮城県震災復興本部（事務局：復興支援・伝承課）
〒980-8570宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号　TEL：022-211-2443

宮城県 Miyagi Prefectural Government　むすびん